

【第1回】市立学びの多様化学校等のあり方に係る有識者等会議

日 時	令和6年10月29日（火）10：00～12：00
場 所	名古屋市教育館 第4・5研修室
参加者 (敬称略)	- 井上 博詞 (所属) 学校法人平島学園こじか幼稚園 園長 元 岐阜市立草潤中学校 校長 - 入江 優子 (所属) 東京学芸大学こどもの学び困難支援センター 准教授 - 武井 敦史 (所属) 静岡大学大学院教育学研究科 教授 - 村中 直人 (所属) 一般社団法人子ども・青少年育成支援協会 代表理事 臨床心理士 公認心理師 - 尾関 利昌 (所属) 名古屋市立小中学校 PTA 協議会 会長 - 山村 伸人 (所属) 名古屋市立富士中学校 校長 - 森 義裕 (所属) 名古屋市立植田北小学校 教諭 - 横井 裕人 (所属) 名古屋市教育委員会事務局 新しい学校づくり推進部長
レジュメ	- 委員紹介 - 事務局員紹介 - 挨拶 - 会議の概要と今後の予定 - 学びの多様化学校について - 名古屋市の不登校施策における学びの多様化学校の位置付けや意義
記 録	●座長の決定 横井 裕人（尾関委員推薦） 推薦理由 すでに設置されている「今後の不登校施策に関する有識者等会議」における議論を踏まえ、本市の学びの多様化学校のあり方を検討することとなった議論の継続性を担保するため、先の会議で座長を務めている横井氏が適任。

	1 会議の概要と今後の予定 ■事務局からの説明…資料を基に説明 ■委員からのご質問・ご意見 特に無し 2 学びの多様化学校について ■事務局からの説明…資料を基に説明 ■委員からのご質問・ご意見 特に無し 3 名古屋市の不登校施策における学びの多様化学校の位置付けや意義 ■事務局からの説明…資料を基に説明 ■委員からのご質問・ご意見 (入江委員) 支援する子どもたちのフェーズを4つに分類する事により、支援する子どもたちの現状を固定化して捉えてしまう。 資料11 ページの中にある「児童生徒一人一人の思いや願いを尊重し、全ての児童生徒に多様な学びの場を確保すること」に対しての思いがあまり入っていない。 学校で学ぶ意欲がある、新しい学校でチャレンジしたい、色々な場所で学びたい等の子ども達の意欲が出るフェーズの捉え方や表現が良いと思う。 (村中委員) 学びの多様性、多様化というのを自分の言葉で説明すると、『いつ、どこで、誰と、何を、どのように学ぶか』ということ、子ども達が主権者として選択できる教育を提供すると、定義付けている。 そのため大人側、教育側が何を提供するかってことばかり今まで議論されてきたが、その結果として『いつ、どこで、誰と、何を、どのように学ぶか』という教育にまつわる様々な諸要素が、子どもの希望や自己決定等の主体性というものにどれだけ委ねるか、ということがこれから問われてくることだと理解している。 その上で『家から出ることができるが、在籍する学校に行くことができない』等の表現は大人側のジャッジによるもので、主が子どもではない。加えてこの支援する子どもたちの4つのフェーズは日々変化するものであり、固定的に捉えてしまうと子どもの状況の変化に対応しきれない。 支援する子どもたちの4つのフェーズの中には、『いつ、どこで、誰と、何を、どのように学ぶか』の『どこで学ぶか』という場所としての区切りの視点しか含まれていない。『何をどのように学ぶか』という視点がない。
--	---

『どこで学ぶか』という場所の部分と、『何をどのように学ぶか』という学びの提供、あるいは子ども達の選択肢の部分、について議論を分けて整理する必要がある。

今回作る学びの多様化学校は、不登校施策の中核であると同時に、名古屋市における学びの多様化推進の中核を担う施設である。その2つの機能を担うことで、市立の学びの多様化学校を設置する意義が最大化される。

その観点から、不登校施策における学びの多様化学校の位置付けとしては、「家から出ることができるが、在籍する学校に行くことができない」という発想は分かるが、学びの多様化推進という観点からは、4つのフェーズの子ども達の全てが対象になる仕組みを作らないと本質的な価値の提供にならないと思う。

学びの多様化学校に在籍している子どもだけが支援の提供先ではなく、現学校に在籍している子ども達に対しても学びの多様化学校が何をできるのかも議論の中に入れていき、全体として子ども達を主語にするという、学びの多様化推進の中核という位置付けを同時に持たせることで最大化すると思う。

(森委員)

現場の教員の視点では支援する子どもたちの4つのフェーズに分類されていることでわかりやすく整備がされている印象を受けた。

現場の意見としても、子どものフェーズが綺麗に4段階に分かれているとは思っていないが、名古屋市の不登校対応は現場レベルでは多くの不登校施策がありすぎる。現場の教員（実際は担任）になるとどう対応しているかが分からないというのが、かなり大きな課題であったと思う。

支援する子どもたちの4つのフェーズについても、子どもの意欲が出るような言葉の表現にすることは賛成だが、抽象的な表現になってしまうと現場の教員が使えないとなり、全く意味がないものと捉えてしまう恐れがあるので、抽象的すぎない表現が良いと思う。

現場の教員に対して選択肢を分かりやすくする、ということも意識して考えた方が良いと思う。

(山村委員)

不登校児童が年々増加しており、教員も色々と対応は行ってきた中で名古屋市教委が現場の声を吸い上げ、不登校に対する施策を色々と充実していただいている。

特に本校でも不登校児童の居場所ができた事により、最初は職員も受け入れることが難しいところもあったが、実際に子どもが通って変わっていくのを間近に見る中で教職員の意識も変化してきたと思う。

アウトリーチ支援やその他の様々な施策についても、最初から順序立てて出てきてるものではなく、様々な不登校児童に対する対応として出てきている。今回の学びの多様化学校についても、不登校対応の市の施策として、しっかりと順序立て整理していく必要がある。

学校サイドとしても、しっかりと理解し、子どもたちや保護者と話し合いながら、その子にとって何が適切かしっかりと整理することが非常に大切だと思う。

支援する子どもたちの4つのフェーズについては、順序性があるわけでも、何が重要だという事ではなく、子どもの現状に対して、子どもと保護者と話し合い、1番良いものを選択していく中で、学びの多様化学校やその他の子どもが受けられる支援を整理していきたいと思う。資料の15ページの図が誤解を招かないように整理する必要がある。

(武井委員)

支援する子どもたちの4つのフェーズとネットワーク機能の2つについて考える必要がある。

支援する子どもたちの4つのフェーズについては、学校の立場からは非常に分かりやすいと思う。順序性がないという事も名古屋市もそのつもりで記載していると思う。

ただし、見た人の観点に立つと『在籍する学校に行くことができない』という表現があるが、学びの多様化学校に入った瞬間にそれは在籍する学校が学びの多様化学校となる。

『自分のクラスに入りづらい』『家から出ることができない』これが縦に並べられれば、目指す価値としては学校に戻ることにイメージされやすい。

ただし、学びの多様化学校に入るということは転校する事になり、事実上の問題として学びの多様化学校で元気になったから自分の在籍校に戻ろうという傾向は極めて少ないと思う。

中学校以降の高校や就職等の先の事を考慮すると、高校は中学校よりも更に多様性も増え選択肢は広がっていく。学年の問題や保護者の考え方、本人の問題も考えなければならない。

不登校児童の本人が適切に判断出来るとは限らないし、不登校児童の本人も状況的にも混乱したり、学校に戻りたいけど戻れないという意識の葛藤が起こる。

その上で需要となるのがネットワーク組織だと思う。

不登校というのは、フリースクールで指導している方や、学校の教員として不登校児童を見ている方、学びの多様化学校、親の会、と見ている立ち位置によって現象は多種多様に見える。

行政で一括して窓口を作ったとしても、相談する人によって、そのあり方は多様に見えてしまう。そういう多様性を前提と置いたときに、どういうネットワークが必要なのか考える必要がある。行政で一括して窓口を作って、相談内容により割り振られるような形では、多分いい方向に向かうことは難しいと思う。

相談窓口とその出口戦略も含めた居場所のあり方と、両方とも伏線化し、互いにどのような子どもを支援しようとしているかを理解し同じ視点に立つことが必要。教員側のダイバーシティが問われている。

他の学びの多様化学校で良かったとされる事例は、教員の研修効果があるため、今までの生徒指導と学びの多様化学校で見ている子ども像は全く

違ってくる。それを1つの手掛かりとして、学校教育全体をもう少し多様な見方が出来る様に移行し、その機能を持たせることを期待したい。

(井上委員)

支援する子どもたちの4つのフェーズについては、段階もあるが順序性を感じてしまう。『家から出ることができない』というのは、『本当は家から出るようになってほしい』や『学校に行くことができない』は『学校に行けるようになってほしい』等、本当はこうなってほしいという意図を感じる。

不登校児童はきっかけは色々だと思うが、不登校状態が続くと無気力不安な状態であると問題行動調査の割合も多い。

児童は不安状態にあるため、今の自分を認めてくれるという安心感、というのが大前提であると思っており、『学校に行ってほしい』『家から出られるようになってほしい』など、本当はこうなってほしい事を感じてしまうと、その場所は子どもにとって心地いい場所、安心できる場所にならないと思う。今この場で学んでいることが「それでいいんだよ」というメッセージを与えたいと思っている。

岐阜市立草潤中学校では、不登校は学びの選択肢の1つであって『決してあなたが悪いんじゃないよ』というメッセージを公立の学校として作ることによって、市内全域に広められた事と『あなたに合う場所もあるんだよ』『あなたに合うところもあるよ』というメッセージを示せたことが1番の成果だった。

支援する子どもたちの4つのフェーズについて、資料の11ページに『明日も学校に行きたい、学校が楽しい』と記載があるが、これは学校の目標であり、学校で学んでいる子たちにこういう思いを持たせたいという意味だと思う。学校に来ている子ども達は、『明日も学校に行きたい』『学校が楽しい』と思えるような学校にするために、名古屋市は学校改革をし、教職員の研修をしていると思うが、そのうえで、4つのフェーズの子どもに共通して求めるもの願いは何なのか。同じ黒四角だが、段階が異なると感じた。

草潤中では『ここなら安心していられる』『ここなら行ってもいいかな』『ここなら行ってみたい』という学校にしよう、というのが前提にあった。4つ全てのフェーズの子ども達に『ここなら安心していられる』『ここならまた来てもいい』かなというような、願いみたいなものがここに表現されてきた上で、どのフェーズも『これでいいんだよ』ということを発信していける示し方が良いと思う。

(尾関委員)

星槎名古屋中学校の児童はとても楽しそうにしている。

また地域としても学区の委員長を含めて星槎名古屋中学校を応援しようという気持ちが強い。

地域の盆踊りの際も、星槎名古屋中学校の軽音楽部の生徒が堂々と歌を披露したり、生徒が出店を出したりと見ていて感動する。

自分の生まれ育った地域ではないが、自分の学区、自分の地元だと思っ
てくれているように思う。

遠くから通ってる子どももいるが、地元の学校へ帰ろうということより
星槎名古屋中学校を卒業したいという気持ちの方が強いと思う。

名古屋に学びの多様化学校ができるなら、堂々と『この学校の卒業生
だぞ』というように親も子ども達も言えるような地域に根ざした学校がで
きると良いと思う。

■事務局からの説明…資料を基に説明

■委員からのご質問・ご意見

(入江委員)

先ほど位置付けについて議論があったが、何のために位置付けが必要なの
かを考えると選択できるということだと思う。

支援する子どもたちの4つのフェーズの順序性ではなく、日々流動性が
あり、選択できるようにする位置づけって何だろうと言うと、内容的な分
かりやすさだと思う。

先生、子ども、保護者、地域の方も分かりやすい内容で、それを皆で相
談しながら、その子どもにとってどんな学びの場が良いかということを選
択できる位置付けが必要。そう考えると、さきほどの4つはフェーズでは
ないのでは。「場」が違うということは明らかであるが、「学び」の違いと
いう観点も必要ではないかと思う。

現状としては、学びの多様化学校は柔軟な教育課程があり、授業を受け
られる。校内の居場所は、授業を受けるというより個別支援に近い内容が
やりやすく、自宅だとICTの使用が有効など、場の特性によってやりやす
い学び方があるように思う。どこにいてもいろんな学び方ができるという
ようにすると、分かりにくくはなり、例えば、校内の居場所でもZOOMでオ
ンラインで教室の授業を受けられるとすると、教育課程を受けられ、違い
が分かりにくくなっていく。しかし「フェーズに合わせた支援」ではな
く、「多様な場を生かした支援」のように、場は異なるが、場が持っている
学びの強み、という観点があると思う。例えば、弾力的な教育課程に全面
的に参加できる、という強みなのか、少人数のリラックス空間で個別の学
びができる、という強みなのか、という観点でみるとわかりやすいのでは
ないか。

それから、「ネットワーク」と武井委員から意見があったが、その場か
ら、どの違う学び方にアクセスしやすいか、という観点もある。校内の居
場所では、教室に近いので授業に参加しやすい、部活動にも参加しやす
い、など。

4つのフェーズの区分が必要なのであれば、帯に入る言葉は『場』にし、
中に入ってくる言葉でその学び方の強みと、その学び方がつながる資源
(別の学び)ということが表現できると良いと思う。

学びの多様化学校の意義という部分では、私たちの調査では、学校生活
のリスタートとか、教育課程があって集団で学べる、友達と一緒に授業を

受けられる、など、「参加できた」という喜びが非常に大きいと思っている。

そこが、個別の支援とは全く進め方が違う、その部分では教員の研修も重要。例えば、高尾山学園ではプレイルームがあり、いつでもそこを選択して行くことができるとしている。そうすると、教員が授業をこう進めようと準備していても、プレイルームに行く子もいる中で、その単元を学んでいる子と学んでいない子が一緒に学ぶ、という場合があり、そうした場合の、授業の進め方や教材の工夫等も含めて、学びの多様化学校における教員研修の意義はとてもあると思う。

学びの多様化学校は、4つのフェーズの機能が複合的に入ってくる施設になる可能性がある。授業も受けられるが、個別の部屋で校内の居場所のような機能もあれば、自宅でICTで授業も受けられるなど、多機能であった場合、センター的な機能を持つことができることに意義があると思う。

(武井委員)

名古屋市全体で6,000名近い不登校児童の生徒数がこれ一気に止まるとは思えない。スピードは鈍化するにせよ、はるかに増えてくるということを考えると学びの多様化学校を作ったとしても全体からすると1%いかないぐらいの数字ではないかと思う。

そうするとこの資源投入という意味では相当大きな資源投入となる。インプットがそれだけ大きいということは、全体の中の1%の子どもが劇的に救われるという形であっていいはずはない。当然その波及効果は考えないといけない。その波及効果は学校の教員に対するものと、児童生徒に対するもの、市民に対するもの、地域に対するものとして色々な形でその位置付けが可能であると思う。

その際にイメージする時に必要なのが、場の問題となる。

特に学校の立地で、例えば新興住宅街なのか、田舎の地域コミュニティが残った場所にあるのか、によってもイメージは相当違うと思う。

もう1つは実際に子ども達が電車を乗り継いで、自分で通える場所なのか、それとも自分では通えない場所なのかでも大きく違う。

どちらが良い悪いではなく、オンライン等により学習の機会を提供こともできるし、短期間での転校を体験することも学校であれば不可能ではない。

色々な戦略が考えられるが、その戦略が違っていた場合を考えると、例えば具体的な場所の候補で、何ができるかをシミュレーションをする等が無いと意義のイメージが湧きにくいと思う。

選択肢が1つだと難しい場合は、選択肢を2つくらい出し、それぞれの場所でのできることを考える事でイメージが湧きやすいと思う。

(事務局回答)

具体的な場所が分かると議論を進めやすいのは理解しているが、具体的な場所については地域の方へのご説明していない状況のためお伝えするのが難しい。

ただし名古屋市内で想定をした場合は、中心街もしくは市内の周辺区で地下鉄沿線の通学が便利の場所で検討をしたいと考えている。

(森委員)

場所の話が出たため希望をお伝えすると、新たな学びの多様化学校を作るとした教育支援センター的な相談機関と物理的に近い方が良いと思う。他府県の学びの多様化学校を見学した際に、相談機関と学びの多様化学校が完全に一緒に物理的に密接している場所があった。

教育支援センターに相談をしに来ていた子どもが、学びの多様化学校に行こうとなった時にも物理的に同じ場所であれば、転校のしやすさから心理的な壁も減ると思う。

教育支援センターと新たな学びの多様化学校との連携も容易なると思う。

(井上委員)

通学のことが話題になったので岐阜市立草潤中学校の事例を紹介したい。1年目の定員40名で40名が来てくれたが、40名のうちのほとんどが保護者の送迎が無いと登校できないと思っていた。理由としては40名のほとんどが深刻な不登校の子どもを受け入れた。希望者があまりにも多く本当はどんな子どもかと思っていたが、今の学校、今の対応では無理だが、岐阜市立草潤中学校なら、という子に来てもらうこととした。

市教育支援センターでも保護者が送迎したり、別室登校も保護者が送迎して夜じゃないといけなかったっていう子たちだったため、保護者の送迎で登校すると思っていた。

しかし、季節や天候によっては変わるが、実際は1年目は保護者の送迎は40名のうち17名、バス通学が15名、自転車7名、徒歩1名だった。想像よりもはるかに自力で登校していた。岐阜市立草潤中学校は岐阜市内の中心にあり、岐阜駅から徒歩10分ほどで市内のどの地域からもバスで1本で来れる乗り継ぎなしで登校できるという立地条件もあり、岐阜市立草潤中学校をその場所に作った理由の1つでもある。

どのように通学するかも想定して、学校の設置場所を検討することも重要だと思う。

名古屋市が考える学びの多様化学校は、支援する子どもたちの4つのフェーズで『家から出ることができできるけど 在籍する学校に行くことができない』子どもたちにターゲットにする。そこに視点を当てるっていうのが1つの考え方と思うが、岐阜市立草潤中学校は、支援する子どもたちの4つのフェーズの全てに対応できる学校を目指そうと思っていた。ただ、希望者があまりにも多かったため、「学校に行くことができるが、教室には入れない」子などは、まずはもう少し学校でがんばってもらおうか、という対応にならざるを得なかった。

岐阜市立草潤中学校は4つのフェーズで全ての子ども達も受け入れられる学校を目指そうと考えた。それが新たな選択肢の1つになるという考え方をした。その中で学校らしいところには行けない子がいるため、草潤中は「学校らしくない学校」づくりを考えた。「家から出られない」子にも、

オンラインでの家庭学習中心でもいいんだよ、そういう学びのスタイルもあるんだよ、オンライン中心で週1、2回は学校に来て学ぶ、そんな学びもあるんだよ、という学び方も例示した。4つのフェーズのどの子どもにも対応できる仕組み作りを考えた。

名古屋市としてターゲットを絞るっていうのは、それも大きな意味があると思うし、全てのフェーズの子どもを対象にしながら、他との連携を図るということを目的にすることもあり得るし、また全く新たな選択肢としてこのフェーズの子にターゲットを絞るということも考えられるので、大いに議論する必要があると思う。

(村中委員)

武井先生の話に出た波及効果は本当に重要だと思う。これだけ多くの学校に行けない子ども達がいる中で、この学びの多様化学校に在籍できた幸運な子どもだけが何か益を得るというのは 経済効果のみならず、さまざまな意味においても惜しいことなので、その波及効果がどんどん高まっていくような政策であるべきと思う。

そこで考えた時に、最終的に1番波及効果が高いのは何かと考えると不登校という概念の消失だと思っている。不登校の子どもたちを減らすとか不登校の子ども達に支援をするのではなく、不登校という概念自体が消失するようなことの中核施策になることが最も波及効果が高いと考えている。

不登校については、心理的な問題を除けば本来、どこで学ぶのかの問題でしかない。学校で学ぶってことが固定化されてるから、学校に行けなことが問題になる。学ぶ場所を子ども達が選択できる時代になれば不登校という概念自体が過去のものになる。

選択肢が複雑になるのは、提供側の視点で整理をしようとするためであり、子ども達自身がどこで、どのように学ぶか、「学ぶ場所」と「学び方」を選択できるようになれば選択肢は鮮明になる。

また、学びの多様性の視点でよりラディカルに考えて言うならば、どこで学びたいかという選択肢を学校に行けなくなった子ども達に対してだけではなく、今学校に通えている子ども達に対しても問うて、あなたにとって最適なのはどこで学ぶことなのか、を提供できる教育システムを作るということを見据えていく、そこまで考えるコアの施策としての学びの多様化学校、という位置付けだと意義がすごくフィットする。

通常学校に来てほしいという願いが透けて見えているのは、そもそも子ども達がどこで学びたいかという権利が、完全に担保されていない中で、「学校を魅力あるところに」と言っていると「学校に来てほしいんだな」と取られてしまう。前提として、家で学んでもいいし、学校以外でも学んでもいい、ということが担保されている中で、学校に行きたいと思ってもらえる魅力的な学校づくりとなっていて、はじめて魅力ある学校づくりという意味が出てくる。

授業形式など、一律一斉の授業しか知らない子どもたちが多いが、そうではないものを様々体験してもらうことで、自分はこれが合うんだ、と感じてもらう。子どもたちがたくさん集まるところには通えない子どもで

も、在籍したい、時には学校にも行きたいし、興味のあるところなら授業にも出たい、子どもたち主体で選択肢の幅が広く、登校することが前提ではない学校で、どこで学ぶかを選択でき、いろんな経験や仕組みや工夫というものを全市に波及させることで、不登校の子どもたちだけでなく、全ての子どもへの波及効果となると思う。

(入江委員)

高尾山学園の例を出すと教育支援センターや、教育委員会の不登校対策の教育相談を行う部署が学校の中にある。教育支援センターの所属の間は、原籍校の生徒なので、高尾山学園の生徒ではないが、高尾山学園に来てみたいという子どもがまず入るところになっている。そこは、自学自習スタイルでの個別学習であり、そこからすぐに高尾山学園へ転学は難しいので、前段階として、学園の一通りの見学（支援員がついてきてくれる）、10 分間の授業参加、1 日過ごしてみる、という転校前の段階がある。

名古屋市は校内の教室以外の居場所の設置が先に進められているが、八王子市は学びの多様化学校が先にある、校内居場所はこれからつくられていくという設置の経緯の違いがある。そのため、他の施策との関連で位置付けをどうするかはとても重要であり、資料の 12 ページに記載のある『多様な教育機会の確保』の中の多様な場の 1 つに学びの多様化学校があり、それは子どもの選択肢の 1 つになるのだと思う。

大人や教育委員会、教育関係者から見た時は、色々な多様な教育機関や学び方も含めた複合的な機関として、これが設置されると『子どもたちが行きたくなる学校づくり』と『多様な教育機会の確保』の間に入って、その波及効果が『子どもたちが行きたくなる学校づくり』に返ってくる。この魅力ある学校作りとか先生方の意識や指導力につながると思う。

『保護者支援・学校外の 専門機関等との連携』については、『子どもたちが行きたくなる学校づくり』に紐づけても良いのかと思う。色々な支援を使いながら先生方が様々な学び方の指導力を高めながら魅力ある学校づくりになっていく、そういう立ち位置が見通されていると研修の位置付けが変わってくると思う。

高尾山学園もここを経験した教員が地域の学校に帰ったらどうだろうかとか、市内の教員を高尾山学園での研修の受け入れもしているが、何を学んで、原籍校でどう生かすのかなどは今後の重要な展望になっている。

(横井部長)

名古屋市の市立の学びの多様化学校が必要であるという、その認識に立って、今後の議論を進めさせていただきたいと存じますが、よろしいか。
→全員総意

●名古屋市立の学びの多様化学校についての委員からのご意見

(横井部長)

ぜひ、委員の皆様から、市立学びの多様化学校をどんな学校にしていきたいか、目指したい学校の姿について、ご意見を聞かせていただきたい。

■委員からのご質問・ご意見

(武井委員)

基本的に学びの多様化学校というのは制度は、不登校特例校の名前が変更したものの不登校状態の子どもが対象になるということが大前提なっている。

学びの多様化学校が合っていると思っても、学校に元気に通っている子どもが、学びの多様化学校を選ぶということは制度上は難しい。学びの多様化学校に行きたいからと学校休んで不登校状態をアピールすることは教育の形全体を歪めるので、望ましい事ではない。

名古屋市は規模が大きいため、本当にいい学校になりみんなが来れるようになった場合に希望者が多くなった場合に入学者を選別しなければならない。良い学校を作ろうとすればするほど、そういう状況になる可能性がある。

その際に一つの可能性として、特任校という制度をとっているものがあり、学校を特色化することで児童が学区によらず入学ができる。学びの多様化学校も本校型、分校型、分教室型と設立することができるが、特認校を作って、その分校として学びの多様化学校を設置する。そうすれば、その特任校に対しては積極的に転校をすることができるし、学びの多様化学校から、より発展的な意味で分校に転入することも可能になる。制度論から考えると、こうしたことも不可能ではない。例えば、こういう選択も考えてみてはどうか。

(村中委員)

学びの多様化学校は不登校施策の選択の中の一部としてしまうと、波及効果の小さいものになってしまう。全ての子どもたちを対象とする 学びの多様化の推進、というところに繋がっていく施策として考えた時に、不登校特例校からの流れで不登校状態にならないと選択できないということは非常にネックになると思う。

名古屋市の学びの多様化学校は、全国的に注目を集めることが予想されたため、名古屋市内の不登校児童のみならず、他府県からの流入も考えられる。今後の展開も考えると、武井先生のお話にあった特任校と学びの多様化学校の併設は、恐らく全国でもモデルが無いと思うので、名古屋市が取り組むには相応しい学校の姿だと思う。学びの多様化学校と特認校が一体と運営されることで、子どもたちは、どちらの在籍かを意識せずに、一つの学校として運営されるような形になるとすごいことだと思う。

(入江委員)

今はいろいろなタイプの学校作りができるようになってきてる。通常の学校でも1割程度授業時数を減らして教育課程を編成できる教育課程特例というものが新しく新設されたと記憶している。これまで時数はオーバーしても良いが減らしてはいけないということだった。今はいろいろな形で通常の学校も特例校になっていけるようになった。学びの多様化学校は、不登校特例だが、本質は教育課程特例。複数の形で並走して、あり方を模索することも良いと思った。

	その際に名古屋にはナゴヤ学びのコンパスがあり、共通の基軸がありながら、不登校の子ども達は学びの多様化学校が、不登校ではないが違う学び方をしたい子ども達は教育課程特例校、ということでもいいのではと思う。沖縄県の名護市には小規模特認校というものがあり、一定の割合で不登校の子も転籍してくる。市街地の学校で馴染めなかった子が、体験活動を豊かにやっている小規模特認校に転籍したり、実質的に不登校特例校の役割も果たしている例もある。そういったいろんなパターンの教育課程のあり方を模索してはどうかと思う。
その他	【次回開催】 ・ 日程 令和6年12月9日（月）10：00～ ・ 場所 名古屋市教育館 第4・5研修室を予定